



鴨都波遺跡の護岸水路（西から）

ふるさと御所 文化財探訪

其の五

弥生時代（１）
弥生人も必死
農業用水路の確保

生涯学習課文化財係
☎内線 696

朝鮮半島からの渡来人によってもたらされた稲作文化は弥生早期（およそ

2700年前）までに北部九州地方に定着し、弥生前期（2500～2300年前・紀元前6～4世紀）には近畿地方までの西日本全体が急激に弥生文化へと移行することになります。弥生時代には従来の狩猟採集の経済に加え、稲作農耕と金属器（青銅器・鉄器）の使用により生産性が飛躍的に高まりました。

鴨都波遺跡（三室・柳田町ほか所在）は南葛城を代表する拠点的大集落（母集落）で、弥生前期から古墳時代後期（6世紀）の長期間にわたって集落が営まれました。

稲作農耕には灌漑施設が不可欠なため、集落の構成員総出で大がかりな共同工事が行われます。鴨都波遺跡第12次調査地（三室）では、弥生中期後半（紀元0年～1世紀ごろ）の大規模な護岸水路が見つかりました。

調査区となった西端から東端までの40m以上にわたり、杭・矢板・横木で護岸された水路はほかには知られていません。調査対象にできた護岸材は841本に及び、調査の及ばなかった下層の水路の護岸材や鴨都波遺跡全体のものも含めると、その数は膨大なものとなるはずです。



度重なる水路の改修の状況



新（手前）・旧（奥）の矢板列

水路は度重なる洪水によって破壊されてしまうので、およそ100年ほどの間に6回以上もの大がかりな改修が行われ、さらにはそれに数倍する補修が行われました。ときには住居の建築部材としての梁や農具としての鋤の未製品なども護岸材として転用されており、護岸の緊急性と鴨都波弥生人の農耕にかけた執念を彷彿とさせるものになっています。

護岸材は、当初は横木を杭で固定するものから、次第に矢板を用いる比率が増え、最新のものでは大形の矢板を密に打ち込んで稲藁を矢板の前後に編み込むようにして護岸するものへと変化します。わずか100年ほどの間に大きな技術革新がなされていることが分かります。護岸水路発達の歴史を知る上でも貴重な発見となりました。

編集後記

北京オリンピック、柔道男子60kg級の決勝戦には大変感動しました。試合は韓国選手とオーストリア選手が戦い、韓国選手が一本勝ちしたのですが、敗れたオーストリア選手は勝者に対してとても友好的で、感激に泣き崩れる韓国選手を助け起こして優しく抱きしめ、さらに勝者をたたえて手をとって高々と差上げたのでした。何という清々しさ。とかく自国の勝利のみが優先されがちなオリンピック競技にあって、これぞスポーツマンシップというべき心温まる光景でした。折しもこの日は8月9日。敵味方の区別なく相手を思いやる心の積み重ねが世界平和をもたらすでしょう。(久)



2008.

9